

「あ、だめ……っ、いもうごかないでえ……っ、」

上半身にのみ学ランを着た男子生徒は、それとは対照的に一糸をも纏っていない下半身を震わせて懇願した。

ここは校内の寂れた一角にある男性用トイレ。

来客用として生徒も職員も普段は使用できないことになっているので、今この時間にもここにいるのはこの男子生徒と、その剥き出しの尻の中心に熱くなった自身を突き立てているこの男性教員だけだった――。

「このように、メスシリンダーの目盛りを読む際には、ここ、液体の平らな面の延長線上を読むこと」

ここ、と言いながら教師は黒板に書いた図をタンタン、とチョークで指した。

微(かす)かな薬品のにおいの残る理科室で、生徒たちがノートをとる静かな音だけが響いている。

「皆ついてきてるかな？ わからないところはないか？」

若い教師は整った顔立ちに人のよさそうな笑みを浮かべた。

後方の席の女子たちがひそひそ声でざわめく。

「あの新しく来た先生……、なんかかっこいいよね…」

「う…、うん。……大人の色気みたいなのがあるよね」

「色気とか！……もーやだー、」

「だってそうじゃんー、……だって、そう思うでしょー？」

「んー？後ろの方、どうした？何か質問か〜？」

教師の問いに女子たちは慌てて黒板に向き直る。

「いつ、いえっ」

「なんでもありませんっ」

「じゃ、続き行くぞー」

「声までカッコいい～」

教師が再び板書を始めると、女子たちは先程よりも小さな声で再びひそひそと会話を続けるのだった。

「じゃ、この問題を、出席番号 10 番の人に答えてもらおうか」

教師が指示すると教室の丁度真ん中あたりに着席していた男子生徒が起立する。

すると、先程までとはまた違ったさざめきが女子たちの間に広がる。

「やっぱ……、あの子かわいいよね～」

「うんうん。しかもあの新しい先生の養子なんでしょ？」

「えっ？……そうなの？！美男美女じゃん～」

「美『女』、ではないでしょ。まあ……確かにめっちゃかわいいけども～」

「……男子の間にも密かにファンがいるんでしょ？」

「そうなの～？！……」

確かにその男子生徒の容姿は女子たちが噂する通りのものだった。

年齢の割に低い背丈。

きめの細かい透き通るような肌に、濡れたように黒い髪。

大きめの瞳を長めの睫毛が縁取り、程よく赤みの差した唇は形がよく、思わず触れてしまいたくなる程だ。全体の雰囲気かとにかく美しく、精巧な人形のような可愛らしさをも兼ね備えている。

「この場合に選択するのは、(ア)～(ウ)のどれかな？その理由も一緒にどうぞ」

教師が指示すると彼は恥ずかしそうに赤面しながら教科書を持ち上げ、何故だか震える声でつかえもつかえ返答する。

「えっと、……っ、この場合は……っ、答えは(イ)で……、」

形の良いつやつやとした唇が動くさまは、じっと見ていると吸いつきたくなくなるような気がする程だ。

「やっぱりかわいー」

「当てられただけで赤くなっちゃって、緊張しいなんだね」

女子たちのひそひそ話はその後もしばらく続いていた――。

理科の授業が終わった。

昼休憩をとるため、生徒たちは準備よく教室から持参してきた弁当を手に、各々の場所へ散っていった。

そんな中、出席番号 10 番の男子生徒だけはまだ教壇で教科書類を片付けている教師の元へ向かった。

男子生徒が教師に何事かを話しかけ、教師は答える。

小さな声でのやりとりは、待ち侘びた昼休みという楽しみに向かう生徒たちのざわめきに掻き消され誰にも聞き取れない。

傍目(はため)には先程の授業でわからなかったところでも質問しているのだろう、くらいにしか見えなかった。

二人は何事かを話し合い、そして密かに校舎の裏へと消えていった。

「あ……っ、」

異物が後孔の柔らかな内壁をすり抜ける感覚に男子生徒は細い腰をびくつかせた。

校庭の喧騒が遠くにうっすらと聞こえる来客用トイレの個室の中で、それはいつも秘密裏に行われていた。

「こんなに孔と前を濡らして……、いけないやつだな」

理科教師は今しがた制服のズボンを脱がせた男子生徒の剥き出しになった尻からローターを抜き取りながら言った

ぬぼ、と水分を含んだ卑猥な音を立て、ピンクの長球(ちょうきゅう)が紅く色づいた窄まりから産み落とされる。

「だめじゃないか、私に授業中当てられたときも普通にしてなくては。あんなに顔を赤くしていたら、いずれあやしまれてしまうぞ」

「う……っ、だ…っ、て……」

だって、それは僕を当てるたびにあなたが遠隔でローターのスイッチを押すからでしょう、と男子生徒は言いたかったが、とてもこの男相手にそんなことは言えな

い。

「いくらこのスパッツを履かせてて周りにバレないからと言って、こうも毎回ぐずぐずになってるんじゃ、私の君に対する躰はまだまだってとこかなあ」

男子生徒は先程この男によって脱ぎ去られたスパッツと呼ばれたものに目を落とす。

無造作に床に置かれたそれは一見ごく普通のどこにでもある代物だった。

しかしその内実は、理科教師が特注で作らせた完璧な防水・防臭加工付きのもので、股間部分にはたとえ男子生徒の雄の部分が立ち上がっても強靱な力でそれを押さえつけ、外部から膨らみがわからないような構造がほどこされていた。男子生徒は毎日、普通の下着の代わりにこれを着用することをこの男に強要されている。

「さ、今日の数値を見よう。……5回か。なんだ、昨日より2回多いじゃないか」

「……っ、」

教師は抜き取ったばかりの腸液にまみれたローターの側面を眺めている。

そこには教師が口にした通りの数字が小さな電子板に浮き上がっていた。

この数字は男子生徒がその日絶頂に達した回数だ。ローターの中にはこの理科教師が個人的な研究で作り出したセンサーが内蔵されており、後孔内の肉の締め付けを敏感に察知しその具合を逐一数値化して記録している。

今日は理科の授業が2時間もあったから、スイッチを入れられる回数もいつもより多かった。教師は生徒を当てるとき以外にも、何気ないタイミングで気まぐれにスイッチをオンにする。スイッチは小型で手のひらに隠れるくらいだから、誰にも気づかれない。

その度に男子生徒は公衆のさなか襲い来る快感に耐えなければならないのだった。しかも、先程の数値が示していたとおり男子生徒は結局堪(こら)えきれずに毎回射精することになる。

顔や体は必死に平静を装っているが、その実男子生徒の自身は特製スパッツの下で大量に白濁を溢れださせられている。

白濁は完全防水のスパッツの内部に閉じ込められ、一滴たりとも零れない。その代わり男子生徒は股間をそのぬるぬるした自らの液に浸しながらその後も授業を受け続けることになるのだった。

絶頂した授業の後是这样してトイレに来てスパッツを取り換えるしかない。

「帰ってからもう一度今朝からの君のデータを見返すよ」



理科教師は残酷な笑みを浮かべて言った。データ、というのは常時自宅に転送されているローターの中の情報のことだ。

ローターに内蔵されているセンサーは精巧で、男子生徒の孔の内壁の収縮具合から排尿の回数、体温、心拍数、発汗の量まで事細かにグラフとなって記録されている。それを自宅に帰ったらパソコンで見返す、とこの男は言っているのだ。

この教師の行動は明らかに常軌を逸しているが、男子生徒には成す術もなかった。数年前に両親に捨てられ、この男の養子になってからというもの、この理科教師は自分に異常な執着を持ち続けていた。それが単純な好意とは一線を画すものだということは、言うまでもない。

理科教師は、男子生徒にいたずらに性的快楽を教え込ませた後、このように常に淫猥な刺激を与え、さらにその身体に関することすべてを観測・管理しようとした。

最初は反抗していた男子生徒だったが、もしも誰かにこのことを言ったり反抗したりすればこれまでに収集したデータを全てばら撒くと脅され、次第に大人しくなった。

「君の躰は美しい。故に貴重だ。私が全て管理しなければ……」

教師は男子生徒の剥き出しになった尻に己の欲望をあてがった。

「……っ！」

息をつく暇も与えられず、教師の肉棒が男子生徒の狭いなかを押し広げる。

「ああ……っっ！」

毎日この時間にされていることながら、未だに慣れない。

男子生徒は立ったままの姿勢で教師に後ろから犯され続けた。

ずちゅ、ずちゅ、と卑猥な音がトイレに響き渡る。

「あ……っ、いや……っ、ああ……っ、やめ……っ、ああ……っ、」

否定の言葉は後孔を穿たれる衝撃と快楽による喘ぎに打ち消される。

「射精は、家までいつもっ、我慢しろと、言ってるだろ……っ」

「ああ……っ、あ、あああ……っ、んあ……っ、あ……っ、っあ……っ」